

鵜養幸雄教授を送る

立命館大学大学院公務研究科長 森 道 哉

鵜養幸雄先生が本年度末に定年退職を迎えられる。鵜養先生は、1979年3月に東京大学法学部（政治コース）を、また翌年3月に東京大学法学部（私法コース）をご卒業の後、1983年12月から2010年3月まで人事院事務総局の職員としてお勤めになった。その間の8年間には、外務省、ILO（国際労働機関）に出向され、また公務研究科へは特別契約教授としての派遣を経験されている。そのほか2005年4月から14年3月にかけては、中央大学大学院公共政策研究科において、兼任講師および客員教授を務められた。

公務研究科（2018年度より募集停止）は、修士課程のみの従来型の独立研究科で、本学の「専門職的大学院」と位置づけられている。鵜養先生の公務研究科とのかかわりは2007年4月の創設の準備から始まっており、その後の取り巻く環境の変化を受けて、筆者を含む同僚とともに19年4月に政策科学部に移籍するまで、教育、研究、研究科運営、社会貢献の四つの柱において、力を尽くしてこられた。順を追って、ご一緒させていただいた11年半の思い出を振り返ることで、鵜養先生のお仕事ぶりの一端をご紹介したい。

公務研究科の小集団演習には、専門の異なる複数名の教員で6-7限に担当するリサーチ・プロジェクトがある。これは、政策科学研究科の同名科目を、公務研究科の教学理念に沿ってアレンジしていったものである。約6年に渡ってクラスをともにする機会を得られたが、たとえば輪読に際しては対象文献に留まらず、派生する事柄への知識を度々披露された。博識ぶりに刺激され、院生同様に調べ、学ばせていただいた点は多い。また、ご担当のコア科目「公務基礎論」などは人気で、修士論文などへの助言を研究室で丹念に行っている姿もよくお見かけした。さらに、院生一人ひとりと向き合った就職活動への支援には頭が下がるばかりで、「人を育てる」ことへの熱意を感じずにはいられなかった。実務家教員として院生に貢献できることは何か。鵜養先生はこれを考え続けておられたように思う。その試みの成果は、修了生が最もよく知っているに違いない。

言うまでもなく、大学にあって研究は大事であり、同僚がどのような研究関心を持っているのかには興味を持つ。行政法の研究者による鵜養先生の被引用論文などを拝見したことがあるが、18年度の在外研究の機会を含め、この点でも基本的に実務家教員ならではの知見の社会への還元を模索されていたように思う。それは、本誌の「略歴・主要著作目録」に所収されているご論考のタイトルを眺めたり、成果物を手に取ってその構成や論述のスタイルを見ることで

も感じられるだろう。なお、特に公務研究科を立ち上げて暫くの頃は、同僚で研究合宿や訪問調査を長浜市、青森市、富山市、また霞ヶ関界限などで行った。研究面での公務研究科の特徴の打ち出し方を意見交換していた日々が思い出される。

教育、研究ともに多事を成し遂げておられるが、組織の足場固めの要となる仕事をしながらこれらを進められたことは驚きである。公務研究科では、2010年4月に専任の教授に就任する前の時期を含め、執行部として副研究科長を4年、研究科長を3年、しかも連続して7年間お務めいただいた。本学でも極めて小規模な教員組織に属していることで、「適齢期」の鶴養先生に管理運営業務が集中した点は恐縮であったが、当時の教員構成を思い返してみても、余人をもって代えがたかったというほかない。

そうした状況にあっても、多様な社会貢献をされてきたことは、鶴養先生のバイタリティのなせる業であろう。ご出身の人事院の公務員研究所客員教授を始めとして、地方自治体の検討会などでの各種委員やJICA（国際協力機構）専門家としてのベトナムへの派遣などを経験されている。また、海外の学会での基調講演や各地での様々な団体における研修講師の実績も豊富にお持ちである。各方面の職員と思いき方々と鶴養先生が、研究室で打ち合わせなどをされているのを頻繁に目にしたものである。そのほか、西園寺塾コーディネーターや霞塾学内アドバイザーなどの職務を通じて、学内外で実践的な「人を育てる」活動を進めてこられた。ここで触れきれないお仕事の詳細についても、「略歴・主要著作目録」をご覧いただきたいと思う。

前述のように、鶴養先生は、19年4月に政策科学部に移籍された。京都から大阪へとキャンパスの異なる研究室の引っ越しを含め、定年退職を控えた時期での慌ただしさを申しわけなく思うが、今年度も学部生に丁寧にご接していただいている。ご退職後は活躍の場を移されるとはいえ、公務研究科および政策科学部、また院生、学部生の将来を見守っていただければと願うばかりである。本学、わけても公務研究科への鶴養先生の多大なご尽力とご貢献に厚く感謝申し上げます。

2020年3月